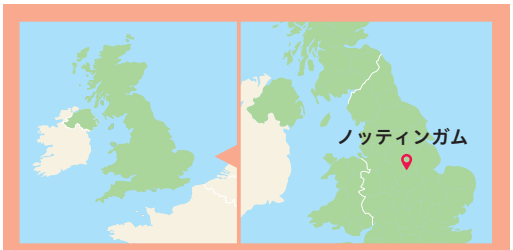
在外研究員滞在記

ロビンフッドの街でデジタルアイデンティティガバナンス最前線に触れた一年間

東京理科大学 経営学部 国際デザイン経営学科 准教授 深見（ふかみ） 嘉明（よしあき）

NOTTINGHAM



滞 在 地　イギリス／ノッティンガム

在 外 先　University of Nottingham

滞在期間　2025 年 4 月 1 日～
2026 年 3 月 31 日



ノッティンガム城にあるロビンフッド像

滞在の概要と研究テーマ

私は 2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日まで、東京理科大学の在外研究員制度のご支援のもと、英国・ノッティンガムにある University of Nottingham に滞在しました。帰国後「ノッティンガムに滞在していた」と言うとほとんどの方から「ノッティングヒル」と勘違いされます。ノッティングヒルの恋人という映画で有名なおしゃれな街ノッティングヒルがあるロンドンからは鉄道で 2 時間半程度北に所在する『ノッティンガム』は、ロビンフッド伝説で有名な East Midland England の古都であり、工業の街から学術の街に転身を遂げつつある場所です。

私は University of Nottingham の School of Computer Science にて活動する Responsible Digital Futures Group を率いる Bernd Stahl 教授に受け入れていただき、責任ある研究とイノベーション（Responsive Research and Innovation）を前提としたデータ利活用環境のガバナンスに関する研究を行いました。

ビザ取得や諸手続きに見るデジタル化の進展と残された課題

私の研究テーマの 1 つがデジタルアイデンティティアーキテクチャガバナンスです。近年は日本でもマイナンバーを基本とした政策が執行され、マイナンバーカードやマイナポータルを利用した行政手続がずいぶん普及してきました。英国は行政分野のデジタル化が進んでいる国であり、実際に体験できる良い機会だと思っていました。確かに便利になっているのだろうとは感じますが、デジタル化が進展したゆえの大変さにも直面しました。英国のビザ（短期滞在に必要な電子渡航認証：ETA ではない長期滞在許可）は既に電子化されており、かつ英国外でのビザ取得手続きは民間企業に外部委託されています。手続のほとんどはオンラインで行い、本人確認のためだけに委託先企業が運営する申請センターに出向きます。大使館や領事館に何度も出向かなくてよく、オンラインで費用支払まで済ませられるのは随分効率的だと思ったのですが、落とし穴がしっかりありました。

渡航前の段階で英国はビザの電子化のみならず、ビザの種別も改定されていました。ところが、委託先企業はもちろん、英国政府公式サイトにも、学術研究を目的とした長期滞在に必要とされる種別に関する情報がほとんど掲載されていなかったのです。英国当局職員に対面で照会する場所は無くなっていますので、自力でウェブなどの情報をもとに解決するしか無い状況でした。

結果的に行政書士さんの支援を受けて Academic Visitor という種別のビザ取得をどうにか取得したのですが、渡航に間に合うか冷や汗ものでした。ビザ取得が間に合わなくて在外研究期間が短縮されるというのは「研究者あるある」なのですが、きっちりこれにハマりかけたわけです。

次のハードルは居住物件探しです。海外の大学や研究機関には、研究者向けの滞在施設を提供するところもありますが、私の場合は適用外であったため、自力で物件を探して契約までこぎつけなければなりません。幸いにして私は在外研究開始直前に英国に所在する東京理科大学の協定校である Brunel University of London に滞在する機会があり、そのタイミングで現地不動産エージェントに紹介された物件を内見し、オンラインで契約までこぎつけることができました。

英国の不動産契約は、日本のように保証人を付ける必要がない場合が多いのですが、電子ビザに紐づく賃貸契約許可番号（Share Code）の発行・提示、英国の携帯電話番号と銀行口座が必要です。

Share Code の発行は電子ビザが発行されれば英国政府 Home Office のウェブサイトから手続きが可能です。オンライン手続きは少しややこしいのですが、数時間で完了できました。

英国の携帯電話番号は、eSIM をオンラインで発行することで入手できます。また多くの物件で銀行口座は Wise と呼ばれる決済サービスの口座で代替することができます。更に契約書の提示から契約締結までの手続もオンラインで行うことができました。現地で 1 日かけて 6 つの物件を内見し、帰国後オンラインで契約手続きを済ませてホテル暮らしを回避できたのは、行政・民間部門ともにデジタル化が進展しているからこそだと実感しました。

電子的な手順で完結する手続はものすごく早い英国ですが、物理的なモノの引き渡しや工事が必要となると、途端に二進も三進もいかなくなるのも英国だったりします。

英国は住所情報データベースの整備が進展しており、基礎自治体への住民登録（と納税者登録）など、ありとあらゆるオンライン契約において、住所をプルダウンメニューから選択すると契約可否や条件などが自動判別されて表示され、迅速に手続きを進めることができます。

ところが、居住する賃貸物件で利用可能と表示されて渡航前に契約したインターネット接続会社が工事のためにアパートにやってきたのは 1 週間後。そしてエンジニアが来訪して初めて大家さんの許可がいる工事が必要となることが判明し、インターネット利用契約は暗礁に乗り上げます。結果的に前の住民が契約しており、ケーブルが残っていた別企業に乗り換えて自宅がオンライン化されるまで 2 ヶ月以上もかかってしまいました。

その他、Amazon を含む宅配サービスの質が悪いなど、人が介したり、物理的な工事が必要になるととたんに時間がかかり、質が悪くなるのです。英国のこのようなアンバランスさに翻弄された現地生活のスタートでしたが、University of Nottingham の研究者のみなさんや物件の大家さんの暖かなサポートにより、英国での研究生活は徐々に軌道に乗ることとなりました。

街のシンボル、グース

ノッティンガムのお祭りの 1 つに Goose Fair というものがあります。ノッティンガムシャーの公式ウェブサイト によると少なくとも 13 世紀から継続して開催されている、欧州有数規模の移動遊園地です。もともと 9 月末の聖ミカエルの日（Michaelmas）の時期に開催される大規模物産市として始まったものです。聖ミカエルの日にグース（日本語に訳すとガチョウになるのですが、本稿では現地語のグースとしておきます）を食べる習慣があったため Goose Fair という名称が定着したものです。現在ではイベントでグースが販売されることはないのですが、Goose Fair 開催時期には街中に巨大なグース像 “Goosey” が設置されるなど、グースはノッティンガム住民にとって身近なシンボルとしての存在でありつつけています。

グースは英国の多くの川や池、湖沼で見ることができるのですが、University of Nottingham のキャンパスにおいても数多くのグースが見られます。本部キャンパスである University Park Campus はもちろん、School of Computer Science がある Jubilee Campus にも沢山のグースがのんびり過ごす池があり、研究に疲れた心を癒してくれるのです。



University of Nottingham の Jubilee Campus にて


キャンパス内を闊歩するグース




地元のエールのタップにも、ダックのモチーフが

ノッティンガム人のアイデンティティたる“AY-UP”

“Centre”と“Center”など、イギリス英語の綴りは米国英語と少し異なるものがあります…と書いていてふと気づきます。英国で使われている言語だから英語、のはずではなかったのか。

渡航前、University of Nottingham の受入手続を始めた時点から、私が書く英語の文章はイギリス英語のスペリングを徹底するようにしました。おかげで Word などのスペルチェック機能が働くと、数多くのスペルミス“扱い”を示す表示が散見するようになり、英語が下手になったような錯覚を覚えました。

現地に行くと日常生活におけるバーバルコミュニケーションで、英語に対する自信が更に砕かれていきます。スペルよりも大きな違いに感じるのがイギリス英語の発音です。1 年間住んだアパートは、管理会社を挟まずオーナーによる直接管理物件でした。英国は木造建築も含め、建物の建て替えサイクルが長いので、リーズナブルな家賃の物件では、水回りや建具などあちこちでちょっとしたトラブルが発生します。そんな時に駆けつけてくれるのが親切な大家さんです。この大家さんは生まれも育ちもノッティンガムのおじいさん。彼が“Maintainance Guy”と呼ぶ友人の大工さんを引き連れて度々駆けつけてくれました。

優しく親切な大家さんなのですが、話している内容を理解するのがとにかく大変。ノッティンガムなまりが強烈だったのです。ノッティンガムはイングランドの East Midland England 地方の中心都市。現地の鉄道でロンドンから 175km 離れているのですが、日本で東京から 175km 離れた都市となると長野市や静岡市です。もちろん長野にも静岡にも現地の言葉はありますが、発音が全く違って聞き取れないということはあまりないと思います。一方英国の中でもロンドンと同じイングランドにあるノッティンガムの発音はかなり独特です。

発音だけではありません。ノッティンガムでしか用いられない表現もあります。その代表的なものが“Ay-up, mi duck!”です。“Ay-up”日本語で発音書き表わすと、「アーイ・アップ」、“What's Up?”と同じような意味で使われます。“Mi duck”の意味は“you”にちかいので、“Ay-up, mi duck!”で「よう！調子はどう？」という挨拶になります。街のシンボル“Goose”でなくて“Duck”なのはなぜ、と最初に思いましたが、“Goose”には「おバカさん」「おマヌケ」というニュアンスがこもってしまうために“Duck”が慣用表現として使われているようです。Goose か Duck かはともかく、地元独時の単語に地元のシンボル（に近い品種）の鳥を含んだ慣用表現で挨拶しあうノッティンガム人達。自身の街と文化に高い誇りをもっていることが伺えます。

イギリスの寒くて暗い冬と Winter Wonderland

様々なアーティストが歌い継いできた曲「Winter Wonderland」。日本にいても、12 月になるとよく耳にする曲ですが、Winter Wonderland とは一体何なのか、と思い続けていました。この曲が生まれたのはアメリカですが、英国を含むヨーロッパでも多くの街で開催されています。ノッティンガムも例外ではありません。

ノッティンガムも中心の広場である Market Square に、冬がやってくると巨大アイススケートリンクが設置され、イルミネーションに彩られた移動遊園地と沢山の魅力的な屋台が集まります。

英国では Winter Wonderland 以外の場所も含め、街のあちこちでクリスマスイルミネーションが灯ります。その期間は 11 月初頭から 1 月初旬というところが多いです。

英国は日本に比べて緯度が高く、朝なかなか明るくならず、昼間もどんより曇っていて、夕方 4 時台にはもう暗いという日々が思いの外早く始まります。

そんな日がしばらく続き、だんだん気分が上がらなくなった頃、イルミネーションと Winter Wonderland が始まります。現地にいるとこの地では、だからイル



広場で開かれるイベント名にある“AY-UP”の文字。そしてサインにはダックが描かれています

ミネーションをあちこちで実施したり、お祭りを毎日行うのかと得心しました。でも、ノッティンガムを含む多くの街の Winter Wonderland は 1 月初旬、というよりは新年になってちょっとしたら終わります。2 月になると寒くて暗い冬にみんなで耐え忍ぶのか、と心配していました。

でも年が明けるとそれは杞憂だった事がわかります。日本とは違い、1 月になるとどんどん夜明けが早くなり、明るい時間帯が伸びてくるのです。気温の絶対値は東京よりも低いのですが、明るい日差しを感じる時間が伸びることで、こんなにも気分が明るくなるのかと自分でも驚きました。イルミネーションと Winter Wonderland の期間がなぜ 11 月から 1 月初頭なのか、その答えがわかった新年だったのでした。

イギリスの産官学連携

在外「研究」でノッティンガムに滞在していたのですから、最後に少し研究に関するエピソードも記しておきたいと思います。日本と同様に英国も国策として AI 技術開発と普及を推進しています。世界的に AI 関連分野で目立つのは米国と中国という印象をもつ方も多いかもしれませんが、現在 Alphabet（Google）傘下の DeepMind は英国で発足した企業であり、現在でも英国に拠点を置いています。

そういった環境の英国で毎年開催されている会議が UK AI Research Symposium（UKAIRS）です。私が所属する Responsible Digital Futures Group（RDF）が発表するというので参加してきました。

UKAIRS は UKRI（学術研究助成を担う外郭団体、要は英国版 JST）が主宰する AI 関連の幅広い研究プロジェクト関係者が一同に集まり、横断的な議論をするために立ち上げられた会議です。アルゴリズムなど技術に関する発表のみならず、RDF チームの主領域である AI 倫理や制度設計など幅広い関連領域の研究者が集まっていました。

研究成果の口頭発表とポスター発表といった一般的な学術会議のフォーマットのセッションの他に、科学技術政策担当者や企業と学術研究者の情報共有、対話の場として基調講演やパネルセッションが設定されています。

基調講演登壇者の 1 人が Department for Science, Innovation and Technology（DSIT: 英国科学・イノベーション・技術省）の Professor, Chief Scientific Adviser（首席科学顧問）の Christopher W. Johnson 氏でした。英国の AI 開発戦略として fairness, transparency and equity といった倫理的側面の重要性を強調した発表がなされ、それを受けて多様な分野の参加者との活発な議論が行われました。

政府省庁の首席科学顧問という要職者に研究者が就き、その肩書が“Professor”というのにまず驚き、質疑応答で現場（大学や研究機関所属）の研究者との間で AI 政策について活発な議論が展開されるのを目の当たりにして、英国は日本と比べて政府と学術との関係性がオープン、かつフラットであることを強く感じるとともに、研究者が科学技術政策について強い当事者意識をもって関与していると思いました。研究者として日々理論的貢献を目指して取り組んできましたが、社会への貢献のために積極的に多様なステークホルダーと関わることの重要性を学んだ貴重な機会となりました。

おわりに

滞在中に当時のスターマー英国首相が就労権と紐づいた公的デジタルアイデンティティ導入政策を突如打ち出して猛反発を受けるという事態が生じました。研究分析対象となる事象を目の当たりにし、現地研究者との意見交換の機会に恵まれるという僥倖を得ることができました。

このような貴重な体験ができたのはひとえに在外研究をご支援くださった IDM 国際デザイン経営学科の先生方や国際支援課の皆さまをはじめとした東京理科大学の方々、Bernd Stahl 教授を紹介いただいた明治大学の村田潔教授、ロンドンから支援くださった東京理科大協定校である Brunel University of London デザインスクールの Vanja Garaj 教授、そして Bernd Stahl 教授をはじめとする University of Nottingham の Responsive Digital Future 研究グループと大学スタッフの皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。あわせて、現地でテレワークを継続しながら私を支えてくれた妻にも感謝申し上げます。



ノッティンガムの Winter Wonderland